

(英語版)

(アラビア語版)

令和四年三月

SF小説：「新・ナクバの東」(9)

第一部：「イスラエル、イラン核施設を空爆す」

9. ナタンズ爆撃(3)



「エリート」は「マフィア」の放ったレーザー誘導爆弾「バンカーバスター」二発が目標地点を正確にとらえたことを確認した。しかし二回の爆発からは土煙しか上がらなかった。地中を数十フィート、強化コンクリートなら数フィートを貫通すると言われる「バンカーバスター」も地下施設までは着弾しなかったようである。

「エリート」は直ちに第二次攻撃体制に入り「マフィア」と同じ航跡をたどり同じ高度と距離から同じように二発のミサイルを続けて発射した。発射と同時に機首を立て直し急上昇モードに入った。「エリート」は急上昇から左旋回し、目標を視認できる態勢をとった。砂塵が少し納まり地上に噴火口のような穴が現れ、中心から白煙が上がっている。砂煙とは明らかに異なり地下で火災が発生していることを示す白煙である。

三番機の「アブダラー」から、赤外線レーダーが白い砂埃の奥に熱線を感じた、との報告が入った。後は止めを刺すだけである。「エリート」はしんがりの「アブダラー」に攻撃を命じた。アブダラーが発射した5発目の「バンカーバスター」が白い航跡を引いて噴火口に吸い込まれていく。次の瞬間そこから真っ赤な火柱が飛び出した。噴火口の周囲数カ所から次々と人間が飛び出してくる。まるで巣から這い出る蟻

を見ているようである。5発のバンカーバスターでナタンズの施設は完全に破壊された。

三番機には胴体内部にバンカーバスター1基のほかにもう一基「バンカーバスター」をはるかに上回る破壊力を持った究極のミサイルが発射されないうまま残っていた。究極のミサイルは「バンカーバスター」の攻撃でも敵の施設を破壊できない場合に限りて発射されることになっていた。この究極のミサイルを発射すれば施設が完全に壊滅することは間違いなかった。それは施設に働く人間の全滅を意味し、また周辺地域もその後長期にわたり深刻な被害を受けることは必至である。即ち放射能汚染と言う被害である。究極のミサイルこそ小型核弾頭を搭載したミサイルであった。

小型核ミサイルはイスラエル国内の極秘の地下貯蔵庫に眠っている核弾頭をもとにピンポイント爆弾として開発したものである。イスラエルが核ミサイルを使用すれば国際問題となるのは陽の目を見るよりも明らかである。しかしその時は、放射能汚染はナタンズの核物質によるものであり、それこそイランが核濃縮を行っていた証拠だ、と言い張るつもりであった。強弁とこじつけはイスラエルの得意とするところである。

(続く)

2 / 2

本件に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

荒葉一也

Arehakahazuya1@gmail.com